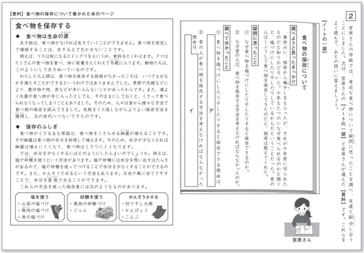
保護者のみなさまへ

イマどき コレだけは知っておきたい！教育NEWS

おこさんの「読解力」は大丈夫？

読む量が増え、資料も多い読解問題！



2

宮原さんの学級では、身近な食べ物について疑問に思ったことを調べ、友達と紹介し合うことにしました。次は、宮原さんの【ノートの一部】と宮原さんが選んだ【資料】です。これらをよく読んで、あとの問いに答えましょう。

【ノートの一部】

食べ物の保存について

調べようと思ったきっかけ
春休みに、祖母から梅干しをもらったが、それが十年前に作られたものだと知りおどろいた。十年もたつのになぜ食べられるのかと聞くと、塩づけにしたり干したりしているからだということだった。昔の人はくふうして食べ物を保存してきたのだと、祖母は教えてくれた。

疑問に思ったこと
① なぜ食べ物を塩づけにしたり干したりすると保存できるのか。
② なぜ昔の人は、食べ物を保存する方法を考えなければならなかったのか。

調べて分かったこと
① 食べ物を塩づけにしたり干したりすると保存できる理由は、ア
② 昔の人が食べ物を保存する方法を考えなければならなかった理由は、イ

【資料】食べ物の保存について書かれた本のページ

食べ物を保存する

◆ 食べ物は生命の源

生き物は、食べ物がなければ生きていくことができません。食べ物を安定して確保することは、生きる上で欠かせないことです。

例えば、リスは秋になるとドングリを土にうめ、食料をたくわえます。クマはたくさんの食べ物を食べ、体に栄養をたくわえて冬眠に入ります。動物たちは、このようにして生きぬいているのです。

わたしたち人間は、食べ物を保存する技術がなかったころは、いつでもおなかを満たすことができるというわけではありませんでした。季節や天候などにより、農作物や肉、魚などが手に入らないことがあったからです。また、運よく大量の食べ物が手に入ったとしても、そのままにしておくと、くさって食べられなくなってしまうこともありました。そのため、人々は昔から様々な方法で食べ物の保存を試みてきました。失敗をくり返しながらよりよい保存方法を獲得し、次の世代へつないできたのです。

◆ 保存のふしぎ

食べ物がくさる主な原因は、食べ物をくさらせる細菌が増えることです。その細菌は食べ物の水分を利用して増えます。そのため、水分が少なくなれば細菌は増えにくくなり、食べ物はくさりにくくなります。

では、水分を少なくするにはどのようにしたらよいのでしょうか。例えば、塩や砂糖を使うという方法があります。塩や砂糖には水分を吸い出すはたらきがあるので、塩や砂糖を使ってつけることで水分を少なくすることができるのです。また、かんそうさせるという方法もあります。日光や風に当てて干すことで、水分を蒸発させることができます。

これらの方法を使った保存食には次のようなものがあります。

塩を使う	砂糖を使う	かんそうさせる
・山菜の塩づけ ・豚肉の塩づけ ・魚の塩づけ	・果物の砂糖づけ ・ジャム	・切り干し大根 ・かんぴょう ・こんぶ

最近の読解問題は、実際の日常生活や学校生活の場面に即した問題設定が多く、文章（子どもが書いたノートなど）に、グラフ、表、地図、ポスターなど複数の資料が提示される。かつてのように、文章だけ出題されることは少ない。
（2019年度「全国学力・学習状況調査」小6国語より）

目的をもって読み、生きて働く読解力へ！

公立高校入試も、大学入学共通テストも、読ませる引用文の文章量が多くなっています。それだけでなく、グラフや図表など、複数の資料を示し、そこから思考・判断・表現させる問題も増えています。これからの時代に必要な「読解力」として、どんなことが大切なのか、細川太輔先生と考えました。

「読解力」の定義が昔とは大きく変わっている

上の問題は、2019年度に実施された「全国学力・学習状況調査」の小6国語の問題です。「身近な食べ物について疑問に思ったことを調べ、友達と紹介し合う」という場面設定の大問で、子どものノートと資料が示されています。設問では、

・疑問に思ったことの内容として適切なものを4つの選択肢から選ぶ問題
・子どものノートの空欄に入る内容を、あとの条件にあわせて書く問題

などが出題されています。「このときの○○さんの気持ちは？」「筆者の主張はどんなことですか？」といった、目的が明確でない情報の取り出しは出題されていません。

ここで押さえておきたいのが、2000年から3年に一度実施されているOECDのPISA調査（国際学習到達度調査）です。最新の2018年調査では、「PISA型読解力」は次のように定義されています。

> 自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組むこと

PISA調査では、目的をもってテキストを読み、目的に応じた情報を取り出し、活用することが重視されているのです。いわば「よりよく生きるために、社会で生きて働く読解力」ですね。

今、学校教育でも、物語文での登場人物の心情や背景の読み取り、説明文の要旨のまとめといった、内容の正確な確認に終始する授業はほとんど行われていません。こうした従来型の授業では「社会で生きて働く読解力」を育成できないからです。

私は光村図書の国語教科書の編集をしましたが、従来型の読解力への反省を踏まえ、だいぶ前から、教科書はアクティブ・ラーニングの学びに変わってきています。新学習指導要領によって、通知表の評価の観点が「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つに整理された今、**自分事として、目的をもってテキストを読み、社会とのかかわりの中で主体的に問題解決を図る資質・能力となる「読解力」**を磨いていくことが重要な課題なのです。

私立中高の入試問題などでは従来型の読解力を問う場合もありますから、学校教育で育てようとしている「読解力」とのギャップを感じている保護者もいらっしゃるのではないかと思います。私の娘も、今年、中学受験でしたので、受験問題が求める「読解力」と、学校で育てようとしている「読解力」が違う、ということを実感しました。

ですが、小学校はもちろん、中学校の授業も「社会で生きて働く読解力」を育成する方向に、劇的に変わりつつあります。お子さんの国語の教科書をご覧になればわかります。まずは、保護者のみなさんに、**求められる「読解力」が大きく変わっていることをご理解いただきたい**と思います。

お話してくださったのは……

細川太輔先生
埼玉学園大学大学院
客員准教授

東京大学教育学部卒業。東京学芸大学連合大学院修了。教育学博士。私立小学校教諭、東京学芸大学附属小金井小学校教諭、東京学芸大学准教授を経て現職。著書に『学び合いで授業をアップデート AI時代の国語授業の作り方』（学陽書房）、『のびーる国語 四字熟語・慣用句・ことわざ』（監修／KADOKAWA）、『「こと・もの・ひと」3つの視点でデザインする国語授業アイデア23CASES』（東洋館出版）など。

高度情報化社会の読解力は複数のテキストを読む力

オモテ面の問題では、設問内で「梅干し作りに関する情報を深めるために」も資料として提示されています。日常の場面に即した文章や資料など、複数のテキストを結びつけながら読む問題は、公立高校入試や大学入学共通テストでも出題。ＰＩＳＡ調査の「読解力」のテストでも、２０００年のスタート時から出題されており、日本の子どもたちが苦手な課題として指摘されてきました。

なぜ、複数テキストが出題されるのか。それは、グローバルな高度情報化社会で生じるさまざまな問題に対処できる、実用的な読解力があるかを見るためです。そのため、次のような複数の多様な「テキスト」が出題されているのです。

- 物語、随筆、説明文、解説文、記録文など
- 非連続型テキスト……図、表、グラフ、写真、イラスト、地図、チラシ、ポスターなど

複数の連続型テキストの読み取りについて、東京学芸大学教職大学院の配生、中野舞香さんが小学生におもしろい実験をしました。

Aの文章　大豆にはタンパク質が多くふくまれている

Bの文章　肉にはタンパク質が多くふくまれている

↓

大豆は“畑の肉”

AとB、両方の文章を読ませ、「大豆はタンパク質が含まれているから、畑の肉」と呼ばれている」という結論を導き出せるか、という実験です。

最初の実験では、AとBの文章を何も言わずに子どもたちに読ませました。次の実験では、「大豆が、畑の肉」と呼ばれているのは、なぜだろうう」という目的を提示してから、両方の文章を読ませました。すると、後者のほうが点数が高かったのです。

この実験から見えてくるのは、Bの文章を、Aの文章の情報を深めるために活用する、といった経験が乏しいこと。しかし、効果的に社会に参加し、よりよく生きるためには、複数テキストを読む「読解力」が欠かせません。小学生のうちから、目的をもって、2つ以上のテキスト間同時に読む経験をたくさん積むことが大切だと考えています。

複数のテキストを読むことで深い思考へとつなげたい

前述した実験では、2つの文章を読むとき、どんな読み方をしましたか？と子どもたちに聞いています。すると、「キーワードに着目して読んだ」という子どもがもっとも多く、「共通点に注目して読んだ」「読む順番を変えた」「目的を確認しながら読んだ」「大事だと思うところを丁寧に読んだ」といった答えが上がりました。

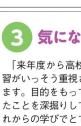
複数テキストの読解は、教科書にもたくさん入っています。小学6年生の例を挙げてみます。

- ひとつの物語で、Aさんが主人公のバージョン、Bさんが主人公のバージョン、2つの文章を読む（複数テキストを関連づけて読む）
- 自分がどんな本を読んできたかをまとめる（複数テキストから情報を取り出し、整理する）
- 「やまなし」を読んだあと、宮沢賢治の伝記を読む（一方のテキストを、もう一方のテキストの理解を深めるために活用する）

ＰＩＳＡ調査では、２０１８年から、ウェブサイトへの投稿文、電子メールなどのデジタルテキストからも出題されています。実際、今の子どもたちが日常的に接する「読む」は、紙に書かれたものだけではありません。教科書などで出会う文章をひとつのきっかけとして、図書館に行ったり、インターネットで調べたりして、どんどん世界を広げ、深めていく。それが「社会で生きて働く読解力」につながっていくと思います。

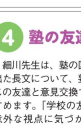
これからの「読解力」を育てるために大切な4つのポイント

1 多様なテキストをたくさん読む



「今年の大学入学共通テストでは、どの教科でも読解力重視の傾向が見られました」と細川先生。限られた時間にたくさんの文章や資料を読み取る力は、ぜひ身につけたいものの。日頃から、本はもちろん、新聞やネットニュース、ちょっとしたお知らせなど、読む絶対量を増やしましょう。そのとき、読ませっぱなしにしないで、「何が気になったことあった？」と聞いてみて。

2 好きな本は何度読んでもOK



お子さんが、もう読み終わった本や、完結したマンガを何度も読んでいることはありませんか？　ほかの本を読めばいいのに、と思うかもしれませんが、これはOKなのだそう。「何度も読み返すことで、思わぬ伏線や作者のしかけに気づきます」と細川先生。結末がわかっていると安心して読める、という効果も。

3 気になったことを深掘りする

「来年度から高校では探求型の学習がいっそう重視されるようになります。目的をもって読み、気になったことを深掘りしていく姿勢は、これからの学びでとても大切です」と細川先生。ひとりの作者を追いかけて読む、「保存食」をテーマにした本を探して読む、といった読み方をお子さんに提案しては。

4 塾の友達と話す

細川先生は、塾の国語の宿題で出た長文について、塾の同じクラスの友達と意見交換することをすすめます。「学校の友達とは違う、意外な視点に気づかされることがあると思います」。読んだ内容をふまえ、自分の意見を話したり、自分とは異なる意見に耳を傾けたりすることで、より深い思考に。

一般社団法人 Networks of Educational Alliance
NEA 教育アライアンスネットワーク
2021年5月19日発行
担当／NEA事務局（生澤和弘、千代延勝利、柳裕樹）
イラスト／堀口順一朗
デザイン／高橋裕子　編集／渡邊良子